
ネームレス

T・F

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネイムレス

【Nコード】

N3165Z

【作者名】

T・F

【あらすじ】

記憶を求める少年の物語。

彼を支えるのは常識だけ。

しかしそれさえも、彼の目の前に訪れた現実は奪い去っていく。

荒唐無稽で途方途轍もない世界の裏側に身を投じた少年は、記憶と世界の未来を巡って走り出す。

「プロローグ」(前書き)

T・Fと申します。

当サイトへの投稿は初となります。

一生懸命書きました。

せっかく無料ですので、思う存分お読み頂ければ幸いです。
お待ちしております。

忌憚のないご意見感想をお待ちしております。

「プロローグ」

二〇一二年 某日。

通常、軍事基地に置かれるレーダーには、電磁波が用いられる。レーダーから発された電磁波が対象物にぶつかり、跳ね返ってきた反射波を計測することにより、対象物との相対距離や正確な位置・方向を算出するのである。

しかし昨今、そういった通常のレーダー・システムでは感知されにくい兵器が、先進国を中心に次々と開発されるようになった。

ステルス 隠密性を備えた兵器だ。

それは主に戦闘機や戦艦に施される装備で、レーダー波を大きく屈折させて反射波を正方向へ返さないようにしたり、機体の装甲にレーダー波を吸収させる性質を備えた素材を用いたりするのである。ただ、レーダーも馬鹿ではないので、いくらステルス兵装されていても、距離が縮めば縮むほど発見しやすくなる。また目視されれば、ステルスはナンセンスな道具に成り下がる。

最近ではレーダーを送信機と受信機に分けて設置し、曲げられたレーダー波をキャッチするような高度な物なども考案・開発・応用され、進歩を続けている。

しかし、太平洋を越えて浦賀水道に差しかかったとある未確認飛行物体は、現代技術の粋を極めても太刀打ちできないほどの、完全と呼ぶに相応しい隠密性を獲得していた。

透過して目視できず、レーダー波を吸収し、かつゆるく屈折・歪曲させるので感知されず、自身の熱量を外気と同調させて熱量測定器や暗視装置サーモグラフィ ナイトビジョンによる発見を回避している。

さらにその未確認飛行物体は、ほぼ無音で悠々と飛行していたのだった。

まさにUFOにも匹敵すると思われる、恐るべき性能を有した飛

行物体だ。

日本の海自及び米軍の、二つの横須賀基地の眼前を難なくクリアしたそれは、東京湾上空を突き進み、深夜の都心へと向かっていた。

「っていつかぁー、今回の作戦^{コレ}、完全に拉致ですよねー」

未確認飛行物体：もとい、ある組織の所有するハイテク輸送機

DEM 3 2 の中で、女が仰向けに寝転がりながら訊いた。彼女は機内右側の縦座席^{ロングシート}を全て占拠して、他三名の乗組員を向かいの席に追いやっている。

今年で二十一歳になる女のだらしない格好と物言いに、丸坊主の巨漢は溜め息をついた。

「何度も言わせるな、エリ。あくまで保護だ、保護……」

エリというポニーテールのよく似合う美女は、それでも食ってかかるように言った。

「いやいや、コレ絶対拉致ですよ。だって寝込み襲うんでしょ？」

しかも対象ってまだ十七歳の子供」

「言つな。気が重いのはお前だけではない。しかし、上からの命令だ。従うほかあるまい」

「命令って……。またあのバグって人からのタレコミですよ。信用できるんですか？」

「できると上が判断したんだろう。お前の勘繰りも分からんでもないが、だからこそ我々が差し向けられている。いかなる状況にも対応できる、我々がな」

「へっ。敵の偽情報^{フリップ}の可能性が消えねえんじゃ、体のいい当て馬扱いじゃねえかよ。いくら俺達でも、こんな人口密集地でドンパチだ

なんて面倒は御免だぜ」

エリではなく、若い男が口を挟んできた。

銀髪のウルフカットの下で、鋭い三白眼を光らせている。彼は巨漢に続けて言った。

「まあ、それ抜きにしてもだ……。もしも対象がノーマルだったら、責任取れんだろうな？」

「それは……。その時だ」

苦い顔をする巨漢に、銀髪男は立ち上がって声を荒げた。

「一人の人生懸かってんだぞ、こんなことで犠牲者出してたら組織の名折れだろが!!」

「……名無しの我々に折れるものがあるか。少し頭を冷やせ、ケン」

銀髪男 ケンは、舌打ちして機内の壁を蹴った。

その様子^にエリは、「ワンちゃん怒られてやんの。カツ」わるう
」

「ちっ……！ 黙れよ、プレデター女」

「ああん！？ 今なんつった!」

「やめんかっ!!」

巨漢の雷声が、わずかに機体を揺らした。

「貴様らはどうしてこう、いつもいつも……!!」

『酒^{しゅ}顛^{てん}隊長さん、アンタの声はデカすぎる。気を付けてくれないと墜^{てん}ちちまっぞぞ』

「ぬっ……!!」

この輸送機を操縦する機長からの、機内アナウンスだった。エリがそれを聞いてほくそ笑んでいる。

そんな彼女の性悪な様子にケンが悪態をついて、また騒がしくなった。

機長は苦労の絶えない巨漢　酒顛に同情しつつ、「三十秒で到着する。準備は良いか」

『良いと言えば良いし、悪いと言えば…』

酒顛はタッチパネルに軽く触れた後、横にある液晶ディスプレイに向かって喋った。彼の指紋を認識し、操縦室のディスプレイ上に彼の名前と映像が表示される仕組みだ。

酒顛の困り顔に、機長達は微笑を浮かべていた。

しかし次の瞬間、そのつるりとした頭に青筋が立ったので息を呑んだ。

『うるさいぞっ！！』

割れた声が、ビリビリとヘッドフォンを震わせる。

機長は咄嗟にそれを外していたのだが、どうやら間に合わなかったようだ。耳を押さえ、呻くように、「ユ、ユー・ハブ・コントロール」…「アイ・ハブ・コントロール」副機長は苦笑いを浮かべて、操縦桿を譲り受けた。

『残り二十秒です。ハッチ、開きます』

副機長の礼儀の通った声が響いて、機内後部にあるパイロットランプが緑から赤へと変わり、点滅した。

『風速、高度、共によろし。降下ルート上に障害物見当たらず。オ
ールクリアー』

それを確認するよりも早く、戦闘服にゴーグルをかけた酒顛達
四人の隊員は、ランプ下の大きな後部ハッチに並んで待機してい
た。

「そもそもアンタ、めんどくさいのよ!」

エリとケンの口喧嘩は、ますますヒートアップしていた。ハッチ
が開いて滑り込んだ突風に機内がかき回されても、彼らは互いを指
差して文句を言い合っているのだった。

「何で一々、アンタに体臭断らないといけないわけ!？」

「仕方ねえだろうがっ、俺だって好きでこんな鼻持って産まれたわ
けじゃねえんだ!」

「そんなの分かってるわよっ! レディーに対してのマナーとかエ
チケットとかの問題を言ってるのよ! アンタはインモラルで陰ケ
ンなの、アンダースタンツ!？」

「んだとコラっ!？ テメーだって、ちょっと体温高かったら、目
が痛いからどっか行けとか言うだろうが! テメーはエゴイストで
人類のエリ屑なんだよ!」

エリはブンとむくれて、「ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァーカ!! ヴァー
カ!! ヴァーカ!!」

東京の夜空に、知性の欠片も無い子供の暴言が木霊した。

もう一度明記しておく。エリは今年で二十一歳になる。

しかしケンにはそれが効果靦面のようで、必死になって耳を塞い
でいる。

「るっせえっ、このアマ！！ 耳がキンキンすんだろっがっ！！」
耳を聳するほどの風音で、酒顛にはあまり聞こえていない。
けれどもケンには、エリの声がハッキリと聞き取れる。
彼はネコ並みか、それ以上に鋭敏な耳を持っているのである。

「いいから早く行け！！」

業を煮やした酒顛が、彼らをハッチから突き飛ばした。「ぎゃあっ！！」と汚い悲鳴を上げて高度四千メートル付近から落ちていく彼らに、酒顛はまた一つ大きな溜め息をついた。
残るもう一人の隊員が、慰めるようにして彼の肩に手を置く。

「リーダー……」

「ウヌバ。俺、胃潰瘍になりそうだ……」

「すまないリーダー。イカイヨーとは何ダ？」

「……………」

ウヌバは、アフリカ少数民族出身の屈強な、酒顛よりもデカいナリをした男で、日本語は只今激しく勉強中の身である。

酒顛は何も言わず飛び降りた。その目はわずかに潤んでいた。

その理由が分からないまま、ウヌバも後に続いた。

目的地は、東京都内のある総合病院だ。

風速がゆるいお蔭で、落下の軌道が大幅にズラされることはない。たとえ小さな敷地が着地ポイントで、どんな天候でもそこへピンポイントで降りる術があるとしても、これは面倒がなくて好都合だった。

彼らにとって最大の不都合とは、ただ単に思いも寄らぬ場所に降

り立ってしまうことではない。そこで人目についてしまうことなのである。

およそ時速二百キロ前後で落下する中、まだエリはケンに向かって何かを叫んでいる。

彼はそれをうつとうしいので無視することに決めた。

代わりに、ミーティングで話された任務概要を思い出した。

円卓がある部屋の中心に、ホログラム映像が浮かび上がる。四人を模したキャラクターが、輸送機からスカイダイビングしているシミュレーション映像だ。

『目標ポイントは、都内の病院だ。輸送機で上空まで接近し、ダイブする』

ケンはゴーグルのテンブルに触れて、電子マップを起動させた。ひっそりとした深夜の街並みに、道路や建物の名称が表示される。もう一度触れると、真下から少し北へズレた位置に、小さく赤いエリアを確認できた。

目標ポイントの、病院の屋上である。

ハンドシグナル 手信号で隊員達に何やら伝えたケンは、空中でくるりと仰向けになった。さらに両腰に隠れていたレバーを引き出して、先端のボタンを押す。すると、本来パラシュートが収まっているはずのバッグから、地上方向へ大量の空気が吹き出された。

『あとはマップで位置確認しつつ、フロート・バッグ 浮遊機械で屋上に降りる』

フロート・バッグ 浮遊機械とは、彼らが独自に開発した、個人浮遊を可能にする機器のことだ。

小型の特製エンジンが内蔵された箱から、ボックス 圧縮した空気を噴出さ

せることで、空中での上下及び前進運動を実現させた代物である。
左右の動きは腰を捻るなどしなくてはならないが、上手く使えば奇
抜な動きをいくつも可能にする。

それを使いこなす彼らは、反動でひっくり返りそうな胃を抱えな
がら、屋上へと着地した。

「病院の屋上に降りたら三手に分かれる。俺とウヌバは、
窓側を伝って対象がいる個室付近で待機。エリは屋上から院内の人
間を監視。ケンはペントハウスから侵入し、組織が先に送り込んで
いる諜報員と合流しろ」

ケンを筆頭に、それぞれ打ち合わせ通りに行動する。ケンは諜報
員に開けられたと思われるペントハウスの扉から院内へ忍び込み、
急いで合流地点へ向かった。

「諜報員？」

「フリッツくんだ」

「ちっ、またアイツかよ」

「フリッツくん、私達の行くところ行くところ絶対いるよね」

エリは楽しそうに笑っていた。

「彼はよくやっている。ハードスケジュールにも拘らず、任務は確
実にこなしてくれる」

酒顔もそんな風にフリッツを褒めていたが、ケンは面倒臭そうに
口を歪めていた。

「制限時間は最大十分だ。通常よりもイレギュラーが多いことが予
測される。慎重に、かつ確実に遂行するぞ。キーマンはお前だ、雪
ま

町ケン副隊長。^{サブリーダー}頼んだぞ

』

イレギュラー 一般人との遭遇や、戦時介入。

街中での任務は久々だ。気を抜いた途端に後ろからズドンということは、この国ではないだろうが、隠密に動くに越したことはない。自分達を敵と認識し得るのは、何も一般人だけではないのだから。

「つつても、アイツは…」

回想から頭を起こしたケンの目に、院内の常夜灯に照らされた人影が映った。

その人影は、こちらに気付いた途端に、「おーいつ、ケーンちゃん~~~~ん！」

子供でも知っている院内の禁則事項を、深夜二時過ぎに破り捨てるこの男こそ、組織所属の諜報員 フリッツである。彼は無邪気に両手を振ってケンを呼んでいた。

「ケーンーちゃん、こつちこつぽっ!？」

ケンは飛び蹴りを決めて、彼の暴走を阻止した。

(大声出してんじゃねえよっ、イタリア人!！)

必死に声を殺して怒鳴りつけるも、フリッツは気にも留めず、「いきなり蹴り技とはゴアイサツだなあ、ケンちゃん。ついでに修正しておくよ、僕は生粋のドイツ人だよ」

真面目で厳格な、ドイツ人の鑑だよ。

フリッツは相変わらずニコニコした顔でそう言った。

色白で、見るからにひ弱な男だ。こんな奴が世界各地を飛び回って、実行部隊であるケン達のバックアップを成し得ているのだから、

人間見た目だけで判断できるものではない。

(嘘言うな、お前絶対イタリア人だろっ)

「失礼だな、彼らと一緒にしないでくれよ。僕は彼らが嫌いなんだ…」

急に鋭利な顔つきになった彼に虚を突かれ、「そ、そうなのか…」とケンはいささか辟易した。

「ふう。ところでエリーは？ あの天保山のように慎ましい胸を拝みたかったんだけど」

「そういうところがイタリア人っぽいつつうんだよ！」

「まあまあ、怒鳴らない怒鳴らない。病院では静かにね」

(テメーが言うかつ、テメーがよおっ!?)

気圧された自分が情けない。

今が任務中でなければ八つ裂きにしてやるところだったが、彼はどいうわけか任務中にしか現れないので、ケンのストレスは溜まる一方だった。

「ハハハ、それより時間は大丈夫かい？」

しまった。

ケンはすぐに経過時間を見ようとゴーグルを操作した。が、「ちよっとケン、早く進みなさいよ！ 作戦時間、分かってんの!？」

エリからの通信の方が早かった。

フリッツのせいで、予定を大幅に狂わされている。

エリの役目は、屋上からケンをサポートすることだ。

ケンの能力を考えれば、この程度の任務を一人でこなすことなど造作もないのだが、リスクを無に等しく軽減する為には必要な措置

だった。

彼女は屋上で目を閉じて、あるものを見ている。

彼女は目蓋の裏、もとい研ぎ澄まされた意識の中で、事細かな生体反応を把握している。建物の内部で蠢く動物や、稼動する機械から発される熱。赤外線を精確に知覚キヤッチしているのだ。それは彼女の能力 《サーマル・センサー》によるものである。

彼女は熱量測定器などの機械に頼らず、体一つでそれを可能にしている。

そして他の三人も同様に、それぞれ別の、一般人には成し得ない能力を持っている。

野生動物以上に発達した聴覚と嗅覚を持つケンは、ゴーグルに付属するヘッドフォンの音量を最小にしてから、「案内しろ」とフリッツを歩かせた。

最終目的地は、この下の階にある個室だ。二人は足音一つ鳴らさないように歩いていた。その途中、フリッツは数枚の資料をケンに手渡した。

「対象のカルテのコピーだ。帰ったら清芽先生きよめにでも見せてあげてよ」

急に後ろにあった気配がピタリと止んだので振り返ると、「…おい、フリッツ。こいつはどういう了見だ？」と言って佇む、酷い剣幕のケンがいた。

フリッツにとっては予想通りの反応だった。先に用意しておいたセリフを言おうとした時、エリから通信が入った。

『階段から誰か上がってくる！』

二人はすぐに近くのトイレへ隠れた。

ケンは嫌な臭いに高い鼻を曲げながらも、接近するのが当院の若

いナースだと判別した。微かに香水の香りがして、聞こえる足取りが軽かった。

「早速僕の出番のようだね。任務の方は任せたまよ」

そう言っつて、フリッツは堂々とした面持ちでトイレから出て行つた。

ナースはフリッツを見つけると、声を潜ませて彼を窺めた。

(あつ、フリッツさん！ 夜間の散歩はくれぐれも控えてくださいつつ言っつてるでしょつ)

(OH、スミマセーン。ですがラッキーでース。お蔭でこんなにキュートな妖精ちゃんに出逢いマーシタ)。Danke ありがとう Jesus ジーザス

(もお、ホントに口の軽いドイツ人ねつ)

(男が女スキ。ソレ、万国共通、人類の必然でース！)

フリッツの軽口に、ナースはウフフと頬を染めて笑っている。

患者衣を着ていれば溶け込めるのだろうか。というかそもそも、フリッツは何の病気で入院していることになっているのだろうか。てかやっぱり奴は、イタリア人っぽいのだが…。

フリッツがナースを別の場所へ誘導するのを見計らつて、ケンは無数の疑問を浮かべつつトイレを後にした。

『フリッツ君、相変わらずね。それより、さっき何か言おうとしてたけど…』

エリの通信で思い出した。力が入つて、眉間にも手に持ったカルテにもシワが寄る。

「リーダー、聞こえてるな？」

湧き上がる感情を打ち殺したような声色に、『…何だ』と酒顛は神妙に応答した。

「今回の目標が十代のガキだつてのは聞いてる。ヘレティックの可能性があるから保護するつても、組織としての筋が通っていると思えば納得する余地がある。だけど…」

ケンはズカズカと廊下を歩いて、一つの扉の前に立った。静かに開けて、唇を震わせた。

「だけどなあつ、記憶喪失のガキをパクれとは一言も聞いてねえぞ…っ！！」

『記憶…喪失……！？』

メンバーの顔色が変わった。

彼らにとって、ヘレティックという言葉は特別で、それに属する者達は残らず保護の対象となる。

標的が病院の個室に入院していると聞き、彼らは間違いなく重症患者だと予感していた。

敵に襲われた可能性も考えていた。

子供だというのを知って、保護するのに気が引けてもいた。

しかし、^{アイデンティティ}存在意義を失っている者を相手にしろとは寝耳に水だった。

「おい、こんなガキ連れ帰ってどうする気だ！？ 記憶が無いのを良いことに、マインドコントロールでもやるつってのか！！」

ケンは病室の窓に向かって怒鳴り散らした。

閉じられた窓の外には、酒顛とウヌバの姿がある。彼らは安全帯ハーネスから伸びるロープで、屋上からぶら下がっている。

窓越しの酒顛の口が動き、『任務は絶対だ』とヘッドフォンから響いた。

『我々が背負っているのは、特定された一国家の命運ではない。世界の、全ての未来だ』

それは痛いほど知っている。産まれた時からずっと、身に沁みて味わってきた。

自分に流れる血は、その全てを教えてくれていた。

『我々は、それを背負えるだけの力を持っている。その力を正しく行使して、世界の確実で豊かなる進歩の礎となる。小さな任務でも、その為の歯車の一つだ。どんなに過酷でも、ミスをするわけにはいかない…』

「この呑気に眠ってるガキを持ち帰ることが、世界の為になるのか…!?」

室内に一つだけあるベッドに、十七歳の少年が眠っている。

彼に複雑な顔を向けるケンの様子は、部屋の隅に設置された監視カメラにも見られている。

しかしそれは、フリッツによって事前に画像処理されているので、実際の映像として録画されることはない。

『少なくとも、彼の為にはなる。彼がもし本当に、我々と同じヘレティックであるならば、敵対する何者かに狙われることになる。万一、その力が悪用された時、彼を殺すのは我々だ。俺は、そちらの方が耐えられん…』

大いに有り得るケースだ。

彼らの世界では、ヘレティックの奪い合いは日常茶飯事だ。殺し合いもあれば、家畜のように高値で売買されることだってある。

そうなる前に保護するのが、彼らの仕事の一つだ。

ケン は納得したのか、はたまた己を殺したのか、しびしび窓を開けて、酒顛とウヌバを部屋に入れた。

巨体を揺り動かす彼らの背中を月明かりが照らし、薄暗い病室で眠る少年の上に大きな影を落とした。

「ケン、お前は間違っていない。だが俺達のいる世界では正しい判断ではない。これは、力を持った者の宿命だ」

ギツと齒軋りを立てるケンをよそに、酒顛は廊下に目をやった。

「フリッツくん。良ければキミも、彼の為に祈りを捧げてくれ」

バレたかといった具合に、フリッツが現れた。

先程のナースを、ナースステーションで眠らせてきたらしい。仕事に差し支えない程度に、短時間だけ眠らせる麻酔薬を使ったのだ。

「そういうの苦手だけど、酒顛さんに言われたら断れないねえ」

酒顛達は少年に向かい、またエリは屋上から深く祈った。

「彼の未来に、不滅の光があらんことを…」

* * *

酒顛達は少年を麻酔で、さらに深い眠りへと誘なった。

酒顛は彼を軽々と担ぐと、窓から屋上へ引き返した。心地良さそ

うに眠る彼の寝息が、彼らの良心を酷く揺さぶった。

一同が部屋から出て行くと、フリッツはその窓を閉めてから病室を後にした。

低空飛行の輸送機が無音で近付き、屋上のヘリポートの真上で空中待機する。ハッチから縄梯子が垂らされてきて、酒顔達はそれをよじ登っていった。

侵入時にスカイダイビングしたのは、輸送機が特定のポイントで二度も止まらないようにする為だった。

彼らが少年を連れて峙へ帰っていった後、フリッツは院外の公衆電話から連絡した。

「予定通り、任務成功しました。ええ…ええ……え、今からですか？ いえ、問題ありません。セーフハウス放棄後、すぐに向かいます」

また仕事だ。

また、嫌な仕事が入った。

今度も、胸糞が悪くなる仕事だ。

「……クソつたれ共がっ！！」

フリッツは柔和だった顔を豹変させて、受話器を投げつけた。

弓形の月が浮かぶ、春の暮れのことだった。

「プロローグ」(後書き)

どうもT・Fです。

後書きはフランクにいきましょうか。

今回はとりあえず「プロローグ」を投稿しました。

今後、「一」〜「五」〜「エピローグ」という流れで【第一章】を連載していきます。

正直なところ、書き貯めができていないので、投稿スピードは遅いかと思います。

かてて加えて遅筆というスペシャルな特性。

参ったね、こりゃw

書き貯めができていない理由としては、小説賞への投稿に力を入れすぎたせいですね。

だから次々新しい物を書いて、書き貯めができなかったというわけです。

言い訳ですね。

まあ、それはさて置き、前書きでも述べましたが、せっかくなので可愛がってください。

何分お堅い作風ですが、形にはなっているかと思えます。細かいところは皆さんにお任せします。

もう自分では分かりませんw

おっと、肝心の「プロローグ」に触れてなかった！
すみません。

作品名の「ネームレスって何?」とか、「で、主人公どいつよ?」
と思われたことでしょう。

それは次回投稿します「二」にて明らかになります。
本当にすみません。

「プロローグ」では、謎の特殊部隊が、記憶喪失の少年を拉致する

という、いかにもありがちな流れになっています。
その目的は？ 少年は何者？ 流れに乗れねえ！
みたいな感じですが、そこはやっぱり「プロローグ」のご愛嬌って
ことで。

あまり長くなってもしょうがないですね。

お疲れ様です、ここまでご覧頂きましてありがとうございます。
それでは次回の投稿まで、さようなら。

P・S・最近寒いので、お身体にはお気をつけください。

〔一〕（前書き）

一話目です。

長い作品です。

気長に付き合ってください。

首を長くしてお待ち頂けるような作品を目指してゆきます。

どうぞ、よろしく。

暗闇が広がっている。

茫漠とした黒が、視界を埋め尽くしている。

少年はそれを呆然と眺めていたが、そうしていることが急に恐く
なつて、人を呼んだ。

誰かいないのか、どこなんだここは。

しかし返事は無い。

木霊するばかりの自分の声に絶望し、自分はどこにいらんだと頭
を抱えた。

そうじゃない。

少年は顔を擡げて思い至った。

分からないのはこの場所のことでも、置かれた状況のことでもな
い。本当に分からずにいて、本当に知らなくて、本当に知りたがる
べきは 自分自身のことだ。

少年は混乱した。錯乱と言ってもいい。

自分は誰だ、何者だと叫び、喚き、喘いだ。

答えてくれる人がどこにもいなくて、少年はその場で頼れるほか
なかった。

怖い。誰か助けて。

ボクを、教えて…。

信じた憶えのない未知の存在に乞うた時、目の前に小さな光が射
し込んだ。

その中に見覚えのある誰かの後ろ姿を見て、少年はその人の名を
呼んだ。

そうした途端、忘れていたことを全て思い出した。

自分が何者で、どうして忘れてしまっていて、何が突然襲いかか
ってきたのかも 今まで記憶してきた全ての情報を思い出した。

少年は駆け出して、叫んだ。光の中にいる、彼女の名を叫び続け

た。

彼女は艶やかな髪を靡かせて、こちらへ振り向いた。逆光で顔が見えない。

その顔を見せてほしい。いつも不安だった自分に、癒やしと安らぎを与えてくれたキミの笑顔を、もう一度見せてほしい。

縮まらない距離にもどかしさを覚えながら、少年は懸命に手を伸ばして 叫んだ。

「????」

「っ!!」

白い世界を掴むように、汗ばんだ手があった。天井に伸ばされた、少年の細い手だ。

不純物の一切を取り除いたかのような白い天井から、電灯が強い光を放っている。

悪夢から覚めた少年は、伸ばしていた手をゆっくりと目の前に置いて遮光した。

ここはどこ…、いや、だから、そうじゃなくて

「目が覚めたようだね」

「……う…?」

仰向けのまま首を左へ捻ると、白衣を着た眼鏡の男が椅子に腰掛けていた。

若くて、優しそうな人だ。

「ずいぶんと魔されていたけれど…大丈夫かい？」

「…誰、ですか？」

寝起きの少年は頭が回らなくて、質問に質問で応えてしまった。

しかし男は不満な顔一つせず、少し笑って、「僕はこの施設の医療主任だよ。そしてここは僕の部屋…」と背凭れに身体を預けて室内を見渡した。

少年はそれに釣られて首を回らせた。そうして初めて、ベッドで寝ていたことに気付いた。

「と言っても、見てのとおり医務室なんだけどね。ここが一番落ち着くんだ」

「…医務室。病院じゃないんですか？」

意識はハッキリしている。冷静に話を聞けるし、言葉のニュアンスの違いも判別できる。

医師は少年が意外と落ち着いていることに驚くと、「カルテは読んだよ。少し、診察しようか」おもむろに聴診器を耳に掛けた。

視診。聴診。触診。そして打診まで、体一つでできる身体所見を全て終わると、医師はもう一度カルテに目を通した。本来あるべき場所から無断でコピーされた、彼のカルテを。

「うん、問題無いね。えーと、名前は…」

「早河…誠、という名前らしいです」

らしい、か。

医師は沈痛な想いを隠し、「憶えていないのかい？」

「……色んな人に訊かれましたけど、何も、思い出せません」

名前も憶えているが、これは憶えているとは言えない。知らされて、知っているだけだ。

医師は少し眉をひそめると、「そう…」とカルテを裏向きにして机の上に置いた。

「間違えていますか…？」

「いや。キミは真正銘、早河誠くん本人だよ」

「よかった…」

心底から安堵した顔は目も当てられない。見た目のひ弱さ以上に、臆病なメンタルの持ち主である医師は、耐え切れずにカルテをファイルに挟んで、棚に直した。

「先生は、知らない先生ですね」

意表を突かれた医師は、机に向かったまま固まってしまった。

落ち着け。嘘は慣れていないがシラを切り通すんだ。ほんの少しだけ効力がある嘘をつけば、それで済むんだ。

「キミは…その、病院を移ったんだよ。もっと高度なりハビリができる、ここにね」

「寝ている間にですか」

「そうだね。事前に通知できていればよかったんだけど…。驚かせて悪いね」

「いえ、そんなことは…」

誠は少し顔を俯けて、「…先生。これからボクは、どうすればいいんでしょうか」と幼い子供が自信無くこぼすように言った。

「それは 記憶を取り戻すには、ということかな？」

「よく…分かりません。きっとそうした方がいいんですけど、意欲が湧かないんです」

失った記憶の価値さえも解らないのだから、それも仕方ないか。

ならばと、医師は思った。

人の記憶には、一体どれだけの値打ちがあるのだろうか。彼が失った記憶は、どこに落ちて、誰に拾われているのだろうか。

空想が空想を呼んで、医師は場違いに自嘲した。

医師という名の、一端の科学者のくせに何を言っているんだ。記憶は、彼の中にしかない。早河誠は、その仕舞い場所を忘れていくだけに違いないのだ。

しかしと反論するもう一人の自分がいる。直感が、どうしてもそれを譲らない。

そうして一人難しい顔を浮かべて思索する医師を見て、誠が首をかき上げている。

結局、医師は益体もない疑念について深く考えるのをやめた。

誠は少し情緒不安定なきらいがある。もっと錯乱している方が普通な気さえする。他人事のように笑っている男の首を絞めてもおかしくない。

しかしそうじゃないなら、やりやすい。

「運動しようか」

「運動？」

「そう、身体を動かすんだ。幸い掠り傷程度の軽症だし、安静にしておくのが滅入るのなら、元気が出ることをした方がいい」

医師は無言も言わず、「さあ、行こう！」と誠の手を引いて、医務室を出た。

「あ、あの…。先生、お名前は…？」

「清芽^{きよめ}ミノル。みんなは清芽先生と呼んでくれるよ」

別室。

いくつもあるモニターに、誠と清芽の顔がアップになって映っている。彼らの今のやりとりを、監視カメラがリアルタイムで撮影した映像だ。

それらを眺める丸坊主の巨漢　酒顛しゅてんドウジは、腕を組んでうなずいた。

「さすがは清芽先生。上手く誘導してくれたな」

「オッサン、ボスは何て言ってるやがった」

銀髪で三白眼の男　雪町ゆきまちケンが訊いた。

酒顛は肩をすくめると、聞いたままを口にした。

「御苦労、次の指示があるまで待機。次の任務も最善を尽くせ？」

組織の長　ボスと呼ばれる初老の男は、広々とした室内の一番奥にある執務机に座って、そう言った。ロマンスグレーのオールバックヘアに、背後の壁一面に据えられた強化ガラスから射し込む光が反射して、いつそう厳めしく見えた。

「もはや名言化してますね。いつもそればっか」

細身でポニーテールの女　エリ・シーグル・アタミが苦笑する。ボスは、感情を表に出さない男だ。彼女に至ってはここ数年、先のセリフ以外聞いた覚えが無いし、ニコリともしないあの鉄仮面にはゾツとするのだった。

それでも、彼の掲げる思想や理念にだけは共感できた。

この組織がいつから続くものかは定かではないが、世界の為に見返りを求めずに、粉骨碎身の覚悟で戦うという度を越した献身さは、感動さえ覚えたのだ。

エリは、こんな自分にもできることがあるのだと、組織の存在に

感謝していた。

「しかし、今回はコレを渡された」

酒頭は一枚の有機Eレデータファイルを見せた。そのA4紙のよ
うにペラペラとした半透明のフィルムは、触れるだけでパソコンの
ディスプレイのように多くの情報を映し出す。この一枚に、週刊誌
一冊分の情報を記録できるというから驚きだ。

エリはそれをタッチパネルの要領で触って、画面をスクロールし、
「何ですか、コレ？」

「早河誠の、大まかな来歴だ。例のバグという人物が得た情報ら
しい」

「…あの人、一体何者ですか？ 大体ボスだつて、変声器越しの声
としか喋ってないんですよ。性別さえ分からない相手の情報をま
ともに信用し続けて、大丈夫なんですか？」

「俺に言われても困る。そもそも、ボスも疑っている。ああ見えて
あの部屋の中では、凄まじい心理戦が繰り広げられているという話
だ」

「マユツバって感じい〜」

バグという人物は、近年突如として現れたやり手の情報屋だ。

どこで嗅ぎつけてきたのか、いきなり組織の回線に割り込んで情
報提供してきたのだ。見返りはいらはないと言ったところがまた、彼ら
の不信感を煽っていた。

それが何度か続き、その情報のどれもが組織が知り得ないものば
かりであった為に、組織の誰もが彼を危険視しているのだった。

「バグのことはいい。それよりもエリ、今回の提案はボスも認め
てくださっているが、その上でこのデータを渡された。信じきる必

要は無いが、頭には入れておけ。彼という一人の人間を見極めて、正しいものだけを取捨選択するんだ」

「するんだーって言われても、すぐにはできませんよ、そんなの」
「時間は気にするな。彼の記憶が戻るまで続けなければならんだからな。それにこれは俺達全員で行なう。彼に直接関わることになるであろう我々と、清芽先生達でな」

「それ考えたら今回の作戦、かなり信用性欠いちやう気がするんですけど…」

「今更何言ってやがんだ。ここに連れてきた時点で、信用なんて欠片もねえだろうがよ」

舌打ちの後に、ケンはそう言った。鋭い目が、酒顛に向けられる。

「ケン。言っておくが、俺だって今回の任務の真意は一切聞かされていなかった」

「俺はな、こんな任務まで引き受けちまうことはねえって言ってるんだ」

あの小さかったケンが、道徳的な話をするまでに成長したのは、酒顛にとっても大変喜ばしいことだった。

しかしこの頑なな正義感は、これからさらに彼を追い詰めてしまいう予感がした。

だから思わず、「追い過ぎるな、あの人の影を。誰もあの人のようになれはしないんだ」

かつて英雄と呼ばれた男の姿を、思い浮かべてしまった。

「バカヤロウ、そういうんじゃないよ」

エリは、そう言って部屋を出ようとする彼の腕を掴んで、「待って、ケン！」

「んだよ…っ」

「作戦はもう、次のステップに移行してる」

「…分かってる。お前のくだらない段取りに付き合えばいいんだろ」
「っ、付き合う…の…？ 私達…」

古い少女マンガのヒロインのような顔をして固まった。目が必要以上に黒光りしている。

「気色悪い勘違いしてんじゃねえよ！ 述語だけ拾うなタコ！」

長い通路をそそくさと歩いていく彼の背中に、「気色悪いって何よ、犯罪者面！」

むくれた顔で部屋に戻る彼女に、酒顔は再度確認した。

「エリ、任せていいんだな？」

フグのようだった頬を萎ませて、エリはウインクを返した。

「もっちろん、二人は適当に見ていてください」

無口なウヌバは、アフリカ民族展の蠟人形のように、室内の隅で静かに佇んでいた。

* * *

広い室内で、ウィーンとベルトコンベアが無機質な音を鳴らし続ける。その音に乗って、苦しそうな息遣いが聞こえる。

「きっ、きよっ、め、せんせ…いつ…！」

『何だい、マコトくん？』

「あのっ、ボク、病み上がっ、病みっぱなしなんですけどっ！！」

『そうだね。と言ってもキミは、記憶を少しばかり失っているだけで、理想的な健康体だ』

「それが何だっって言ってますか！」

誠は声を荒げた。

彼は、長い長いランニングマシンの上を延々と走らされながら、天井にあるスピーカーに向かって、清芽に抗議しているのだった。

その様子を、清芽は楽しそうに眺めている。彼はすぐ隣の部屋から、窓越しに話しかけている。誠からはただの白い壁に見えるが、清芽のいる部屋 ラボラトリー 研究室からは、マジックミラーで筒抜けになっているのだ。

ラボ側では十数名の研究員が、PC パソコンのモニターと誠の様子を忙しなく交互に見比べている。端的に言えば、彼らは誠の身体機能を徹底的に分析している最中なのである。

「メギイド博士、いかがですか？」

清芽はすぐ隣で作業する、一際年配の研究者に問うた。

すると、西洋の古典文学に出てきそうな古めかしい顔立ちの白頭翁 ノーブル メギイドは、モニターと向き合いながら、「一般人だ。いたって普通。普通すぎるくらいに普通。覚醒の予兆も無い」そうして伸びをすると、酒顛達の骨折り損だったなという顔を、清芽に向けた。

「経歴はそうでもないんですけどね」

清芽は、ついさつき酒顛から渡された有機EL資料を、メギイドにも見せた。早河誠の素性が、簡潔に記されている。中でも彼自身

ではなく、彼の家系は奇妙だった。

そこでメギドは目を細くして、「…サガワという姓は、日本では珍しいのか？」

「この字の並びでサガワと読ませるのは少ないでしょうね。ハヤカワと読ませるのが普通です。まあ 私が言うのも何ですけど」

「ふむ。それにしても、短命な血筋だな。テロメアが短いというわけでもあるまい」

「ええ…。ほとんどが若くして大病か、不慮の事故です。事実どうであるかは不明ですが、彼には親族がないという事実だけは、こちらの捜査で証明されています」

「まさに、天涯孤独か。よくある話ではないか」

「そうでしょうけど」

「貧困や戦争から孤児が生まれることは、普遍的な社会問題の一つとして世間では認知されているではないか。今では少年兵がピックアップされるケースが多々あるが、それは我々が生まれる遙か昔から起きていた、ごくごく普通の出来事だ。それに比べれば、我々の誕生こそが、彼らにとっては由々しき事態であるはずだぞ」

「ですが、孤児というものは」

フンと清芽の言葉の先を折り、老人は窘めるように言った。

「優しいな、お前は。しかしキヨメよ。親がいる人間が、いない人間に対して行なう同情は、虐待よりも酷い体罰だということを忘れてはならんぞ」

「……………」

「一つの種から離れた我々は、持つ者と持たざる者の価値観の相違点を知らなくてはならない。シュテンがよく言うだろう、？力を正しく行使しろ？」

「しかし身寄りも無く、過去の記憶も無いというのは、あまりに残

酷です…」

「無力であつたならな。しかし、我々と同じならば、その不幸さえも超えられる」

「博士は、我々の可能性を信じていらっしやるのですね」

「人の遺伝子が、我々にこう在れと願い、形にしたのだ。進化とはそういうものである。人間が猿から、いや、深く遡れば海に芽生えた共通祖先が、本能から形を変えようと願ったのだ。それでも思わなければ、我々が生まれた意味が無い。存在意義も、何もかもナンセンスになる。存在を否定されることこそが、この世の最大の不幸だ」

「この世の 不幸…」

息を切らしながらコンベアの上を走り続ける少年が、よりいっそう不憫に見えた。

「組織が…」

「うん？」

「組織がこうして、いとも容易く彼を拉致できたのは、彼に身寄りが無かったからでしょう。ですが、分かりません。どうして、覚醒前に発見できたのか…」

メギドは睨みを利かせ、「つまらん穿鑿はよせ、キヨメ。為にならんぞ」

清芽は黙って、誠を見た。

もしも宿命を知らせる術があるなら、あの少年だけでなく、どれだけの人を救うことができるだろうか。それができない自分が情けない。

清芽は堪らず、誠に話しかけた。

『マコトくん。もう少し、頑張れるかい？』

非情なことを呑気に告げる清芽に、「ええっ、いつまで…!?!?」
と誠は半泣きで叫んだ。

その瞬間、巨大な爆発音と震動が彼らを襲った。施設一帯に、白煙が広がっていく。

「な、何が…?」

ベルトコンベアが急停止して、誠はその場で蹴躓いた。

緊急事態を示す赤いランプが明滅し、ブザーがけたたましく鳴り響く。そこへ通用口を使って清芽が駆け寄ってきた。

「マコトくんっ、逃げるんだ!」

「せっ、先生!? 何がっ、えっ!?!」

清芽は切迫した様子で、混乱する少年の両肩を掴み、「落ち着いて聞いてくれ! テロリストがここを襲ってきたんだ!」

「テロリスト!?」と誠は目を白黒させた。

何を言っているんだ。それはテレビの中だけの話じゃないのか。しかしこの白い煙は、そのテレビでも見たことがある。慌しい様子も。

自分のことは思い出せないのに、何故かこういつつまらない知識だけは、しっかりと憶えていた。

「そ、そうなんだ! 狙いは分からないが、一般人のキミを死なせるわけにはいかない!」

「で、でも」

パンツ!! タタタンツ!!

弾ける音が連続し、それが銃声だと理解したのも束の間、「うっ！」目の前の清芽が、呻きながら誠に覆いかぶさってきた。

「先生!？」

「ぐうぐうっ」

口から血を吐いている。白衣が胸元から血に染まっている。誠は目を剥いて震えた。

清芽先生が、銃で撃たれた。

「行け…、逃げるんだ…!!」

清芽は苦しみなから立ち上がると、誠をラボの外へと追い出した。

「行けえっ!!」

誠はどうすることもできず、ただただ煙に包まれた通路を走っていった。

しかし、清芽を置き去りにしてしまった罪悪感が脳裏を掠めた。踵を返そうとしたが、そこへまた銃声が轟いた。

「^{まで}Wait! ^{まで}Wait!!」

煙の向こう ラボの方をよく見ると、真後ろからガスマスクを被った戦闘服姿の連中が駆けてきていた。

英語だ、外国人のテロリストだ…!!

降伏して助かる見込みが想像できず、誠はとにかく逃げた。

逃げる方向にも煙が充満していた。行き先が見えなくて闇雲に走った。左肩が壁にぶつかって、そのままそれを伝った。まだ遠くで叫び声と銃声が連続している。時折、床が揺れて、天井も軋んでホ

コリが落ちてくる。

誠の神経は衰弱しきっていた。今回のことだけでなく、最初の病院で目覚めてからずっとだ。医者の名乗る中年の男や、少し疲れた顔のナース、警察を名乗る人まで現れて、色々と矢継ぎ早に、のべつ幕なしに質問された。

分かりません。何も分からないんです。ごめんなさい…。

たった三日で、それが口癖になってしまった。

本当に分からないからしょうがないと思う反面、何故分からないだと苛立ちを隠せなかった。自分は知らないのに、他人は自分のことを知っているという奇妙さが怖くて、病院からあてがわれた個室から自ら出る気にはならなかった。面会謝絶にしろらつて、知り合いを名乗る男女が部屋の外で諦めて帰るのを何度も聞いた。

そんな中、一人だけしつこい人がいた。一時間に一回のペースで、自分を尋ねてきた。

声で、女の子だと解った。どういうわけか、聞き覚えのある声だった。

誠は悩んだ末、明日その子に会ってみようと思って眠りについた。

そうしたら、ここにいた。

そうしたら、こうして逃げている。

どうしたら、こんなことになってしまっただ。

彼女に会おうとしたのが良くなかったのか。いや、そんなことは関係無いはずだ。

どうなるかと、変わるわけがない。

今更、変わるわけがない。

「誰か 助けてよ…っ！」

無性に、彼女に会いたくなった。

自分を知るといふ、声しか知らない彼女に会いたくなった。

この混乱した状況から救い出してくれそうな、声しか知らない彼

女の手を求めた。

「キミっ、コッチよ！」

煙の中から手が伸びてきて、誠を右へと引つ張った。壁にぶつかって顔を上げると、ポニーテールにインテリ眼鏡を掛けた綺麗な女性が、彼の手首を掴んでいた。

「ア、アナタは!？」

「私はここの研究員です。とにかくここから離れましょう」

清芽とは別仕様の白衣を着た女性だ。彼女は、?と表記されたボタンを押してニコリと笑った。

誠が無理矢理に引き込まれた場所は、エレベーターだった。扉が閉まり、エレベーターは最下階を目指した。

「な、何でテロリストが来るんですか!？」

「分からないわ」

「ここ、どこなんですか!？ ボク、病院にいたはずなんですよ!でも、清芽先生は医務室だって言って…、その清芽先生も、目の前で……!!」

「人が死ぬところを見るの、初めて？」

「そりゃそうですよ! …いや、分かりません。思い出せません…

…!」

誠は悔しそうに歯を噛み、頭を抱えて座り込んでしまった。

何も思い出せないことと、清芽がテロリストに殺されたことがゴチャ混ぜになっているのだ。

女は彼を気遣い、「安心して。このまま下まで降りたら、ちゃんと逃げられるから」

「ホントですか…?」

「ええ、必ず」

誠は、思わず見惚れてしまうほどの微笑を信じることにした。

幸い、エレベーターは途中で止められることなく一階まで辿り着いた。扉が開く時はさすがに緊張したが、薄暗い空間に人の気配は無かった。

それでも誠は、女の背中にピタリとくっつき、そろそろとコンテナの影に身を隠した。

「ここって…」

「ポートエリアよ。と言っても、水上艦じゃなくて、潜水艦の港」

誠は耳を疑った。潜水艦だって…?

「テロリストはきっと最上階から来たから、潜水艦で逃げれば助かるわ」

女から距離を置いた誠は、訝る目を向けた。

「…どうしたの?」

「せ、潜水艦なんて、どうして持ってるんですか…?」

「さあ、どうしてだろうね」

「答えてくださいよ! どうして潜水艦なんて持って　っ!?」

ダンッ!

再び大きな音が耳を打った。頬に、何か跳ねた。途端に、目の前の情景がガラリと色を変える。ドロリとした原色に近い赤色が、広がっていく…。

「マコト・サガワだな？」

女の真後ろに立つ男は、彼女の肩越しにそう言って、鋭い眼光を突きつけてきた。

「え……あ……」

女はゆっくりと膝をつき、地べたに寝そべって起きなくなった。頬に跳ねた何かも、一緒に地面に流れて落ちた。赤い……コレも

「血……？」

何だ、次から次へと……。何なんだ。死んだのか、死んでしまったのか、この人は……！？

動転する誠に、三白眼の銀髪男は言った。北欧系の顔から発された言葉は日本語だった。

「テメーを見極める。死にたくなかったら、知恵を絞ってみろ」

言っや、銀髪男は彼の足元を撃った。

「ひゅっ！」

「足をすくませてる場合じゃねえぞ」

誠はまた逃げ出した。

どうしてこんなことになってる。

夢か。夢じゃないのか。夢なら早く醒める。

ボクは何も悪いことなんてしてないんだから……！

無数に立ち並ぶコンテナの一つを選んで隠れて、そんなことを心の奥で訴えた。

だが、どうにも自信が無かった。

記憶が無いからだ。

「ボ、ボクは何者なんだ…。もしかして、犯罪者なんじゃないのか……？」

そう思うと急に頭痛がして、頭を押さえた。電流か、虫のような何か、好き勝手に脳内でのた打ち回っているような激痛が走る。

夜道。

三叉。

女。

口。

巨大物質。

クラツシュ。

誰……手？

断片的な映像がスライドショーのように浮かんでは消える。

何だこの光景は。ボクの、「何だ……？」

ふと前を向くと、緑色のコンテナの脇に一本の鉄パイプが立てかけられていた。誠はそれを拾うと、ブンと一振りした。手頃なサイズで、重さも丁度いい。

誠の精神状態はすっかり疲弊し、病んでいる。そんな彼は、思い至る。

どこをどう行っても逃げられないなら、あの男を倒すしかない。

「……ふう……」

誠は深呼吸の後、コンテナの側面に張り付いた梯子を登って身を屈めた。

ズカズカと道を行くあの男を発見し、先に拾っていた鉄片を彼の視界に投げた。

物音に男は銃を構えると、一転してそろりそろりと足を忍ばせて

音源へと近付いていく。

誠はまんまと引つかかってくれる男の死角を奪い、タイミングを見計らって飛びかかった。銀髪を縦に割る勢いで鉄パイプを振るった。

やらなければという正義感で、恐怖はどこかへ消し飛んでいた。

「バンピー一般人ならこんなもんか」

男は失笑すると、誠の奇襲をさらりと躲した。あえなく鉄パイプがコンクリートの地面にぶつかって甲高い音を鳴らす。

誠がマズいと思ったのも束の間、男は鉄パイプを踏みつけると、彼を軽く突き飛ばした。

手から離れたパイプが遠くへ転がる。

「あうっ！」

「死にたくなかったら知恵を絞れつつたろ。次ミスったら容赦しねえぞ」

「何なんですか…！」

理不尽にも程がある。

誠は男に殴りかかった。

「何なんですかアナタは！ 何が目的なんですかっ…！」

しかし軽く受け止められ、またもや突き返された。

「極限だな」

「ひ、他人事みたいに…っ」

「そりゃそうだろ。テメーの人生だからな、俺が介入することじゃない。だが俺にも俺の人生とポリシーがある。それを邪魔するなら、

排除するだけだ」

「排除つて、横暴じゃないですか！」

「世界は理不尽だ。お前が突然記憶を失ったように、状況は唐突に変わって、俺達を強引に呑み込んでいく」

「アナタにボクの何が解るんですか！」

「解りやあしねえよ。だが現状で一つ解んのは、その横暴や理不尽を押し退けるには、テメー自身が行動を起こさねえといけねーってことだ。違うか？」

抗うんだよ。

そう言つて男は、おもむろに戦闘服の胸ポケットから何かのスィッチを取り出した。躊躇なくそのボタンを押すと、爆音が頭上から降り注いだ。凄まじい震動が立て続き、遠くで白い靄が吹きこぼれる。

間違いない。上の階で、爆発が起きた。

「あゝあ。テメーがさつさと捕まらねえから、また大勢死んじまつたなあ」

「ボク…が？」

「そうだ。全員、テメーを守る為に抵抗していやがった。テロリストのリーダーである俺は、上で捕らえた奴らに約束していた。？もしもマコト・サガワが大人しく捕まれば、テメーらの命は助けてやる？つてな」

「そ、そんな…」

「あゝあ。テメーのせいだ」

誠は膝をついて頂垂れた。

「そんなの、ズルいじゃないですか…。さっきはわざと見逃したくせに……」

「知恵を絞れと言っただけだぜ？ テメーが勝手に逃げて、反抗したんだろ」

「…どうして、ボクの為に……？」

「俺には解らねえ話だが、一般的には、大人が子供を守るのに理由なんてねえんだろ」

解らなかった。急に解らなくなった。知っている大人の顔を、十人も思い出せない。その中に、子供を守る大人 親と呼べる人の顔は無かった。

「…そのまま抵抗するなよ。そのまま、死んだ連中の想いを蔑ろにしろ」

病院にいた先生やナースは、とにかく自分を心配してくれた。だけど、欲しい温かさではなかった。事務的に職務をこなしているだけに思えた。ビジネスライク

清芽先生や研究員の女の人は、何を考えているのか解らなかった。この謎の施設で働いているということが不信感を煽るのだろうけれど、何かを隠されているようで、どうしても信用しきれなかった。

「しかし、ただのゲームのつもりだったんだが、イマイチ面白くない結末だったな」

ぼんやりした頭に、不快な単語が響く。
ゲームって、どういう意味だ。

「そう言えば、あの医者はやたら五月蠅かったな。腹撃たれたくせにいつまでもテメーのこと気遣って。庇ったところで何にもなりやあしねえのに…。うぜえったらなかったぜ」

グウンッ！！

何かが勢いよく膨らんだような音が鳴り 弾けた。

同時に、男の腹に巨大な鉄の塊のようなものが飛び込んできた。凄まじいスピードで突進してきたその正体を確かめたのは、コンテナの壁に背中を打ちつけてからだだった。

「テ、テメー……！？」

一体何が起こったのだろうか。

誠が、一瞬消えたように見えた。気付いたら、タツクルされていた。

衝撃で凹んだコンテナの壁に身体を支えて立ち上がる。口から溢れそうになった胃液を意地で押し戻すと、男は少し離れて倒れる誠を睨んだ。

「何しやがった……！」

「……ボクは」

男は両腕を身体の前に置き、腰を落として身構えた。その手に銃は無く、ボクサーのように空の拳を握った。体勢を維持したまま、膝について肩で息をする誠へにじり寄る。

「来いよ。俺もこんな面倒な仕事はさっさと終わらせてーんだ」

「ボクは……」

「力、見せやがれえっ……！」

ボクは 死にたくない。

顔を上げた誠の目は血走っていた。

その様子に気圧された男 雪町ケンの、それ以降の記憶は曖昧だ。

また何かが弾けたような音の後に、誠が視界から消えた。寸秒の後、耳に何か息遣いのような声が聞こえた。振り返ると誠の姿があった。鉄パイプを振り上げて飛来する、誠の姿だ。

「コイツは…っ！！」

「ケンっ！！」

ケンの常人離れた知覚さえも凌駕するスピードだったのは、全てを目撃していた研究員の女 エリ・シーグル・アタミの目にも明らかだった。

ケンは突然真後ろから現れた少年に鉄パイプで殴られていた。少年はあの一瞬で、遠く離れていた鉄パイプを拾って、それをしていたのだ。

反射的に防御しようとするケンの左手は間に合わなかった。後頭部に走った激痛に、目玉が飛び出そうになっていた。彼はそのまま受身も取れずに地面に額を打ちつけて、脳震盪を起こして気絶した。そこで張り詰めていた糸が切れたのか、誠も自分の驚異的な加速度を忘れて、空中で気を失った。地面を転がっていき、壁にぶち当たっても悶えることはなかった。

エリは立ち上がると、口元からダラリと垂れる血糊を拭いた。呆然と湛える目は、誠から離れなかった。

「リーダー、今のは何ですか……？」

コンテナの影に身を隠す、二つの大きな人型の熱源に対して彼女は言っただつもりだ。しかし返事が無い。焦れた彼女は、彼らの下へ足早に近寄った。

「そこにいるのは分かってるんですよ、リーダー…あっ！？」

エリは声を失くした。

隠れていたのは紛れもなくエリやケンが在籍する、組織の作戦部第一実行部隊を率いるチームリーダー 酒顛ドウジだが、その厳しい顔の固そうな頬を、大粒の涙が伝っているのである。

彼に付き添うウヌバも、息を呑んで困惑している。

「ど、どうしたんですか…？ 鬼の酒顛リーダーが、そんな……」

「死んでいなかった…」

「はい？」

眉をひそめるエリを無視して、酒顛は天井を仰いだ。

「？あの人？の気高い志は、死んでいなかった…！」

彼らの声に聞き耳を立てていた清芽も、背筋を粟立てていた。酒顛が言う？あの人？が誰なのか、早河誠のエキセントリックな行動を見れば一目瞭然だった。

だが、何故だ。

何故彼は、覚醒前の彼は、組織に目を付けられたのだろうか。いや違う。バグは何故知っていたのだろうか。

彼が、ヘレティックとして覚醒することを…。

答えの出ない自問に、清芽は腕を扼した。

* * *

『 マコト… 』

下足ホールで、少女が呼び止める。

振り向いた拍子に、履きかけていた靴の踵を潰してしまった。せっかく大事に使っていたのに、酷く気分が悪くなってしまった。

『何だよ、下の名前で呼ぶなって言ってるだろ。もう園児じゃないんだから』

『帰るの?』

聞いてないし。

少年は不満を浮かべながら、『…見れば分かるだろ』

『じゃあ私も一緒に帰ろうって』

そう言って彼女は、下足箱から運動靴を取り出して、替わりに脱いだ上履きを仕舞った。

鼻歌交じりの彼女に、『一緒について何だよ』と不機嫌に問い質した。

『いいじゃん、別に。どうせスーパーに寄るんでしょ? 私もちよ

うど用事あるし』

『勝手に決めんなよ』

『でも、凶星でしょ?』

グツと詰まった顔をした少年は、『…???お前、どっちのスーパー行くんだ。へさきスーパーか、クドームイカドーか』

へさきスーパーは、西の木之村屋と双壁を成すと言われている高級スーパーだ。対してクドームイカドーと言えば、リーズナブルな価格設定で愛されている総合スーパーである。

どちらも少年らの通うこの学校と自宅までの帰り道にあり、若くして一人暮らしをする少年は、毎日必ずどちらかを利用していたのだった。

それをよく知っている少女は、朝刊に入っていたチラシを広げて、『へさき』

『じゃあオレ、クドー行くわ。じゃあな』

そそくさと帰ろうとする少年の鞆の肩ヒモを掴んで、『ちよっと待ちなさいよ、私もクドー行く!』と駄々をこねた。

『何でだよ!』

『???さんに買い物テク教えてもらったから、マコトにもって思ったのに...』

『余計なお世話だ。オレにはオレの買い物の仕方ってのがあんだよ』

少女は悲しそうに口を閉ざした。

マズったか。泣くのか、今で泣かせてしまったのか...?

『最近のマコト、付き合いが悪くなったって、みんな言ってるよ』

『.....』

『マコトは、独りじゃないよ』

『.....』

『勝手に孤立していかないでよ』

彼女はこつこつも言った。

『ちゃんと私達は、マコトのこと、解ってるから...』

少年が何も言えずに立ち尽くす様子を、早河誠はぼんやり眺めていた。

少女の顔の鼻から上が、何故か霞んで見えなかった。

彼女の名前が思い出せない。

おそらく、きっと大切なはずの、彼女の名前を

* * *

「オイ、この野郎。起きろ」

それは、少年 早河誠ならずとも最悪の寝覚めだったろう。ベッドで熟睡していた彼は、掛け布団を引っぺがされて胸倉を取られたのだ。

「よお、マコト・サガワ。昨日はよくもやってくれやがったな」

それも最悪の相手 テロリストのリーダーに。

「あ、アナタは—!!」

目の前に見覚えのある銀髪と三白眼があつて、誠はすぐさま彼の腕を振り払ってベッドから逃げようとした。

しかし、「何処行くんだよ」と腕を後ろに捻られ、うつ伏せに倒されてしまった。

「何するんですか！ 放してくださいよ、人殺し—!!」

「記憶喪失のくせに、妄想力だけは一人前かよ」

「人を殺したじゃないですか！ 清芽先生や、あの研究員の女の人をつ—!!」

清芽も女性も、胸や腹を撃ち抜かれて殺された。この男が率いるという、テロリスト集団に。そして自らも、この男に酷い目に遭った。殺されそうになった。そんな男が、人殺しではなくて何だと言っただ。

そうして無理に腕を捻り返して、自由を得ようともかく少年を見かねて、「ケン、離してやれ」と誰かが命令した。

「肩を痛めてしまう」

「しょうがねえな」

ケンはず手を離すと、医務室の扉付近まで下がった。よく見ると、彼の頭には包帯が巻かれている。昨日の彼には無かった物だ。

誰かが代わりに戦ってくれたのだろうか。

誠は未だに冴えない頭で、そんな的外れなことを考えていた。

「怪我は無さそうだな、少年」

ぬっと誠の視界を、丸坊主が埋め尽くした。「うあっ!？」と彼は思わず腰を抜かして、ベッドから転がり落ちた。

すると、「だ、大丈夫かい!？」すぐに介抱してくれた男は、誠が知る人物だった。

「清芽先生!？ 死んだんじゃないっ」

もう何が何だか分からなかった。幽霊かと思ったが、彼は日本の足でしっかりと地べたに立っている。それに、微笑にも生気が宿っていた。

「安心していいよ、マコトくん。アレは狂言だったんだよ。ホラ、エリくんも生きている」

清芽の手を借りて起き上がると、確かにあの女性研究員と同じ顔がそこに並んでいた。昨日の白衣とはまるで似ても似つかない格好
迷彩服姿で、眼鏡も掛けていないが、昨日の美女と同一人物に
違いなかった。

「アロオ〜、マコトくん。エリだよお、よろぺこ」

手を振ってウインクするエリに、「うっぜ」とケンは舌打ちした。それに腹が立ったのか、エリはどこから取り出したブブゼラ南アフリカの伝統的な楽器 を吹き鳴らした。その独特のけたましい旋律が、狭い室内を駆け巡った。

「やっ、止める！ るっせえっ!!」

ケンは耳を押さえて、涙目になりながら怒鳴った。

丸坊主の巨漢も渋面をたたえて、「俺からもお願いだ、勘弁してくれ」

「ぶう〜」

エリは巨漢に言われると、渋々ブブゼラを手放した。しかしその頃には、すでにブブゼラの姿は無い。今の一瞬でどこに仕舞ったのか謎だった。

呆然としている誠に、巨漢は分厚い掌を差し出した。

誠は律儀にも、条件反射的にその手を握り返していた。丸坊主に電灯の光が反射して眩しい。

「初めまして、早河誠くん。俺はコイツらのリーダー、酒顛ドウジと言っ」

「リーダー…？ テロリストの！？ でも、アレ…、その人もリーダーって言って……」

「だから違えんだよ。ありゃあ全部嘘だ。まったく、呑み込みの悪いガキだな」

ケンはガラ悪く口を挟むと、また面倒臭そうに舌打ちした。

困惑して目を回す少年をよそに、酒顛は後ろで無言のままの黒人に言った。

「ウヌバ、お前も自己紹介を済ませておけ。Self-introductionだ」

酒顛を巨漢と形容するなら、ウヌバは巨人と言えるかもしれない。二メートルを軽く越える高さから注がれる鋭い視線に、誠はゴクリと生唾を飲み下した。

「……………」

「……………何、ですか？」

「……………ウヌバだ」

いや、それは分かっているんだけど。酒顛って人が言ってたし…。誠が挨拶に困っていると、酒顛がフォローしてきた。

「見てのとおり、コイツはアフリカの少数民族の出身でな、日本語が堪能ではないんだ。理解してやってくれ」

「はあ……………」

確かに見た目はアフリカ系部族と言えるかもしれない。

酒顛のように坊主頭でありながら、何故か両のモミアゲと襟足の一部、そして短いポニーテールだけを伸ばして結っているという、一風どころか凄まじく変わったヘアスタイルをしているのだ。

今は無表情だが、怒らせると槍を持って襲ってきそうだと誠は思った。

それはさて置き、誠はとりあえず理解した体を装っておいた。今は少しでも早く事態を把握したい。説明を求めて、見るからに？年長者の顔？をしている自称リーダーに顔を向けた。

「老け顔とか思っちゃダメだよ？」

「お、思ってますんっ！」

「エリ、傷付くぞ」

酒顛は溜め息の後、本題に入った。

「さて、何から話そうか……。そうだ、キミから質問してくれ。でき得る限り答えよう」

「じゃ、じゃあ、アナタ達は何者なんですか？」

医者だと言ったり、研究員だと言ったり、果てはテロリストだ何だ……。彼らの正体は、結局のところ何なんだ。

「何者かと問われるのは当然だが、生憎と一言で語ることはできないのだ。少しこちらの事情に付き合ってもらおうぞ」

誠はここまで来たらままよという思いで、素直にうなずいた。

良い子だと内心思いつつ、酒顛は親切にもなるべく噛み砕いて話し始めた。

「世界には表と裏がある。しかし我々の意味するところのそれを、多くの人間は知らない」

表と裏。

それは一体であるが故に、互いの視線は交わらない、対極と呼べる存在。

「我々の言う？表の世界？とは、常任理事国が実質的に世界を統治している世界のことだ。いたって普通の世界　六十九億人あまり

が生活している世界。キミが生活していた世界だ」

「戸籍で管理された世界。」

「戸籍の無い人間も、しがらみによって国内で管理された世界。国という巨大な単位で、血脈そのものを束縛された世界。」

「対して、？裏の世界？とは、マフィアやテロリスト、政府や社会の暗部を意味するものではない。我々の言う裏とは、表に決して現れない、本来なら実在し得ない存在のことだ」

「実在、し得ない…？」

「我々はその、裏世界の人間だ。我々は表世界の現実を守る為に、自らの存在を表世界から抹消した。当然ことだが、生きる次元そのものは同じだ。しかし我々は、表世界の人々の目に触れないよう、努めて日々を過ごしている。我々は、彼らにとって、この世にはいないのだ」

「戸籍が無いのは当然ながら、国というしがらみから解放され、裏という全く別の単位へ身を移した者達。それが彼ら、裏世界の住人達だ。」

「表世界において、我々がこちらの都合で存在を知らせているのは、たったの数名。その中には政治の場において有力な権限を持つ人物が二人だけいる。アメリカ合衆国大統領と、国際連合事務総長だ」

それ以外は、我々に資金提供してくれる物好きな資産家達などだ。酒頭は肩をすくめる。狂っているだろと言いたげな顔をしている。

「彼らには我々を？ネームレス？と呼ばせた。？知られざる存在？ではなく、？匿名を告げる者？とな」

「バランスを保つって言っつて、どうして知らせたんですか？」

「そうすることで、表世界の彼らは、裏世界の存在を知る。人は、未知に対して畏れを抱くものだ。そして人は、自分達を生物界の上位に立つ身だと考え違いをしている。だから我々は、彼らに告げるんだ。人では到底覆しえない力が、彼らの見えない場所で息衝いていることを。今ある世界を守りたいならば、自らの力で世界のバランスを保てと」

脅迫したと言ってもいい。

ネイムレスに属する巨漢は、不敵に笑った。

「表と裏が、互いにバランスを保つ努力をするってことですか…？」
「そうだ。努力を忘れた生物に待つのは 死、だけだ」

誠は怯えた目で、「も、目的は？ それで、目的ですか？」と訊いた。

酒顛はわずかに眉根を寄せて、真剣な目で答えた。

「世界の、ゆるやかな変化と、豊かな進歩」

「ゆるやか…豊か……」

「我々が裏の世界で生きているのには理由がある。我々は、一般人とは異なる力を持っているのだ」

曖昧模煇なフレーズに、「力…？」と誠は首をかしげた。

「そうだ。我々は、世間一般で言うところの、超能力者だ」

「……それ、本気ですか？」

いい歳した大人が大真面目な顔で言うので、誠は失礼だと思いな
がらも冷笑した。

しかしそれで酒顛と、彼の取り巻き達が怒ることはなかった。む

しる逆に、信じない誠を嘲笑っているかのようだった。

「な、何ですか。普通に考えて、アナタの方が変じゃないですか……!?!?」

「普通、か」

「そうですね。常識的に考えれば、こんな科学の時代に超能力なんて有り得ません」

マーベル・コミックの読みすぎだ！

そう罵ろうとすると、酒顛は豪快に笑った。

「ハツハツハツ、それはおかしな理屈だ。むしろ我々は、逆の考えを持っているのだがな」

「逆?」

「科学を生み出し、ただ単なる動物の枠から飛び出した人間だからこそ、さらなる進化の余地があったのだと、我々は思うのだよ」

「……だからって、超能力なんて……」

「ウヌバ、見せてやれ」

ウヌバはノースリーブで剥き出しの太く逞しい右腕を、少年の目の前にぐいと自慢するように見せた。そして開いた手に少しばかり力を込めた。すると手首から先に、灼々とした真っ赤な炎が発生して、一息に腕にまとわりついた。

「うわっ!?!?」

「物は試しだ。この炎に触れてみる」

「えっ!?!?」

酒顛の指示で、ウヌバは炎の手を誠に向けた。彼の表情に苦痛は見えない。

「その猜疑心を、自分で払ってみてくれ」

凄まじい熱放射だ。火の粉が散っていて、鼻先が軽く炙られているようだ。

しかし誠は何かのトリックで、タネは必ずあると信じて手を伸ばした。

が、「あつつつ、あつつううつつ！！ 熱いですよっ、本物ですよコレ！！」

調子に乗りすぎた。焚き火の炎と同じ、触れば火傷してしまう、あの炎だ。

誠のリアクションに一同は大笑いした。

ケンだけはムスツとしているが、彼らは悪い人ではないのかもしれないと、誠は多少気を許してしまっていた。

「そりゃそうだ。これはウヌバが生み出した、本物の炎だからな」

ウヌバは事が済んだと察して炎を消すが、まるでよくできた手品のように皮膚は全く爛れていない。黒人特有の掌と甲との色味がハッキリと分かれた、綺麗な手のままだ。

清芽が用意してくれたステンレスの器に入った氷水で、手を冷やしつつ、「本当に、超能力者なんですか…？」と誠は質問を重ねた。

「超能力者、突然変異体ESP MUTANT…、様々に言われるが、我々はそういった公的な類ではない。裏世界で生きる我々は、表世界にとって異端的な存在でなくてはならない。故に我々は、我々のような者達を便宜的に、異端者と呼ぶ」
「変人っていう奴ね」

エリは自虐的に言うが、まるで呑気な顔をたたえている。事実そ

うであるから否定のしようがないといった具合だ。

「じゃあ、皆さんもその、ヘレティックなんですか」

「そうだ。我々はそれぞれ固有の能力　センスを持っている」

ヘレティックの使う常識離れの力を、センスと呼ぶ。ケンの異常な嗅覚や聴覚、エリの赤外線を感知する特異な知覚、ウヌバの発火能力　どれもがセンスである。

「我々はこの力を正しく行使し、世界の急速な発展を阻止している」
「どういうことですか？」

「ヘレティックには当然、頭脳が異様に発達している者もいる。彼らは時として、想像を絶する殺戮兵器を発明してしまうことがある。科学にせよ、薬学にせよ、発明や発見とは、ともすれば人類の生活に繁栄を齎す場合もあるが、失敗によるリスクは付き物だ。それが兵器ともなれば、一度の試験運用におけるリスクはあまりにも高過ぎる」

兵器は開発から無数の実験を経て、はじめて実戦投入される。成功すればその価値を認められ、そこで得たデータから毒気を抜いて応用することで、新たな技術として社会の糧になる。原子力が、その一例である。

逆もまた然りだ。

しかしその影には必ず犠牲者が生まれる。

もしも人知を超えた発明があれば、もしもその開発者がヘレティックであるなら、もしも人殺しを前提、あるいはすでに利用された可能性があるならば　酒顛達はそれを黙認するわけにはいかない。　一国がその利権を獲得した瞬間、世界はまた、大きな戦争の火蓋を切ることになるからだ。

「ヘレティックが開発した物は、どれもが常識外れ　つまり、オーバーテクノロジーというやつだ。それが強力な兵器で、万一使われでもしたら、世界のバランスは一挙に崩れて、人類の存亡自体が危うくなる。我々はそれを表世界の誰よりも早く察知して、未然に防いでいるのだ」

「そんなことを……何で……？」

「決まっている。？世界の為？　だ」

「だけど、ボクは一般人ですよ？」

「残念だが、キミは一般人ノーマルではない。キミも、異能なるセンスを持つ、異端者ヘレティックだ」

「そんな……。そんなこと、あるわけないじゃないですか……」

「俺をこんなにしたのは、テメーなんだぜ」

ケンケンは頭の包帯を親指で指した。

「ちょっと待ってくださいよ、ボクは何も知りません！」

彼に怪我をさせた覚えは無い。むしろ痛めつけられていたのはこっちだ。

誠は声を荒げた。

「ボクは……ボクは何者なんですか!？」

酒顛は書類を差し出した。そこに挟まれていた写真には、都立高校の制服を着た誠の姿が写っている。一同の目が、一斉に酒顛へ向けられる。

「この組織のボスが許可した。キミにも知る権利くらいはあるらしい」

誠は恐る恐る書類に手を伸ばした。
いくら捲つても頭に内容が入ってこない。ただの文字の羅列で、
記憶に無いことばかりだった。

「キミは東京で生まれ、五歳までそこで暮らしたが、父親の仕事の
関係で中学三年生まで大阪で生活していた。しかしあることが原因
で、東京へ戻ることになった」

「…え？」

「御両親が、海外旅行中に行方不明になられたからだ」

「行方…!？」

彼に兄弟はいない。早河家は元々兄弟が少なく、短命な家系のよ
うで、伯父や伯母、従兄弟すらいなかった。

「その後キミは、父方の祖母のいる東京の実家に引き取られた」

母親は両親を早くに病気で亡くし、引き取り手が現れなかった為
に児童養護施設で育った。

父親は母子家庭で育ち、食費から学費まで二人で協力しながらや
りくりしていた苦労人だった。

「だが、その祖母もまもなく」

「デタラメだつ!！」

書面にある祖母の名前と享年が目に入るや、誠は叫んでいた。

それに苛立ったケンが、「テーマが知りたいつつつたんだろうが
よ!」と再び胸倉を掴みにやってきた。

「ボクはっ、ボクは…っ!？」

知らない。こんなの知らない。

でも、確かにおかしいと思った。

病院で目を覚ました日からおかしいと思っていた。

ナースが御両親に連絡をと言った時、医師は彼女を止めてひそひそと耳打ち合っていた。

そういうことか。いないから配慮されたのか。

顔も名前も思い出せない親という存在さえも、隠されていたというわけか。

これじゃあ完全に、孤独じゃないか。

「早河誠くん。キミがヘレティックであると判明した以上、我々と敵対している連中は必ずキミを拉致しに来る。ターゲットはキミ一人じゃない、我々もその対象だ。奴らは無抵抗を示さない我々を殺すか、薬漬けにして廃人になるまで扱き使うか、どちらかしかない」

誠はベッドの上で、耳を塞いで身を縮めた。嗚咽が広がって、シートが濡れていく。

その様子にエリは居た堪れなくなつて、「リーダー。頭ごなしに言つても、彼を追い詰めるだけですよ。しばらく彼の自由にできませんか？」

「それもそうだな。彼のことは俺に一任されているし、問題無いだろっ」

「マコトくん。部屋のカギは開けておく。外へ出るのはキミの自由だ。食事も適当に用意させる。もしも困ったことがあれば、コレでコールしてくれ」

清芽はベッドに備え付けられたコンソールの、緑色のスイッチを指差した。

誠は一瞥もせず、膝に顔を埋めるばかりだった。
清芽はベッド周りのコントラクトカーテンを閉めると、酒顛達と一緒に部屋を出た。

誠は、自分が何故泣いているのかも解らなかった。
解らないことにまた、泣き続けた。

* * *

ネイムレスと呼ばれる者達が隠れ住む施設は、世界中に点在している。彼ら自身はそこを家や基地と呼び、特に酒顛達がいるこの基地を本部と呼んでいる。

ここ本部はマリアナ海溝近郊にあり、海洋プレートに張り付く岩盤に擬態している。

内部は近未来的な造りになっており、中央部分では住居や研究室などが軒を連ねている。長い通路を挟んだ反対側は、ほぼ全面ガラス張りになっており、天然のアクアリウムと化している。

あくまで深海にある為、基地内部の光源は、海水から分離させた重水素をエネルギー源にした、熱核融合炉による自家発電形式となっている。海上の現在地と同じ昼夜の明かりを再現し、生活リズムを狂わせない仕組みを取っているなどの手の込みようだ。

その為かは定かではないが、このアクアリウムに紛れ込んだ深海魚は、光という未知の現象を肌で感じ、独自の進化を遂げているのだった。

まるで、この基地に住まう人々のように。

「惨いものだな」

通路で、酒顛はそうこぼした。

すぐその海から厚いガラスを越えて、いつになくどんよりとし

た湿り気が伝わってきていた。

「たとえ記憶があつたとしても、急にこんな話を突きつけられれば混乱してしまうのは無理もない。しかし彼には記憶が無く、過去の自分さえも知らない。交友関係も分からず、両親の顔さえも憶えていない。一般常識だけが、彼を支えている……」

「全生活史健忘と言うんだ。外傷性の、部分健忘だ」

酒顔チームと並んで歩く清芽が答えた。

それにエリが問う。

「つまり、憶えていることと憶えていないことがあるってことですか？」

「そうだね。酒顔くんの言うとおり、彼は一般常識を憶えている。思い出せないのは、自分と密接に関わることだけだ。生後からの生活や近しい人のことを、彼は思い出せないでいる」

「外傷性って言いますけど、アイツ、怪我なんかしてねえッスよ」

ケンは自分の頭を指して、こんな風になつてたら分かるけどな、という顔をした。

「担当医のカルテによれば、確かに頭部への外傷は見られない。しかし彼の脳の一部　記憶野の付近に、小さい傷が修復された痕がいくつも残っていた」

「よく分かりますね、いつものことですけど」

「ハハハ。《体内透視》のお蔭だね。おそらく事故に遭った当時は、深い傷が残っていたんだろうが、今となつては確かめようもない」

当然のことではあるが、清芽もヘレティックだ。

彼はレントゲンやエコー検査よりも精確に、相手の体内を見通す

透視能力を持っている。それに相俟って、ヘレティックならではの優れた身体能力からなる高い技術力を有するので、彼に医療ミスという言葉は無縁だった。

故に人は、彼を神と崇め、尊敬してやまない。

「傷が治っても、記憶は戻らないんですか？」

「別個の問題だね。脳内の電気回路が正常値に戻らない限りは、難しいと思うよ。今の彼の脳は、宝箱のように固く閉じられているんだ」

「……あの子、可哀想ですね」

「そうだね。僕も、そう思うよ」

「エリ。そう思うのなら、強要はするなよ。腫れ物のように、デリケートに扱ってやるんだ」

釘を刺す酒顛に、「腫れ物ですか」とエリは怪訝な顔で訊いた。

「彼の精神が潰れた時に吹き出るものは計り知れん。何せ、彼のセンスは」

ゴッ！！

反動の大きさ、彼が暴走した時の被害規模を考慮した酒顛のセリフは、鈍い音で打ち消された。後ろを振り返ると、顔を俯けたケンが壁を殴って大きなヒビを入れていた。

「アレは、《韋駄天》なんかじゃねえ……！！」

そう吐き捨てる彼に、エリは首をかしげた。

「何言ってるんの。実際に目の当たりにしてきたリーダーと清芽先生が言ってるんだから、それ以外に無いでしょう？」

昨日誠は、秘められた力　センスを発動した。

個々に違った特徴を持つというそれだが、彼のものはすでに《韋駄天》という名を付けられたものだった。まさに神速と呼ぶべき、残像も残さぬスピードは、酒顛も清芽も、過去に幾度も間近で見えたものだった。

それももう、二十余年も前になる。

「《韋駄天》は音速を超えんだろ？　だけどアイツが消えて、俺の背後を取るまでには一秒はかかってやがった。アレは　劣化品だ」

歩き去ろうとするケンの背中が、亡き人のそれと重なって見え、
またもや囁らずも酒顛は口を開いていた。

「結論を出すのは早いぞ。セイギさんは《韋駄天》を扱いきる為に、
肉体を極限にまで鍛え抜いていた。マコトくんも志を持ち、努力さえすれば、きつと　」

「今のアイツを見ただろ。自分のことで精一杯の奴が、世界の為に
何ができるんだ…！」

不愉快な感情が後頭部の傷口を疼かせる。

ケンはギリッと歯軋りを立てた。

【二】（後書き）

どうも、T・Fです。

ということ、主人公の名前は「早河誠」です。

そして彼の能力は、《韋駄天》 超高速の脚力ということでした。こういった作品は、今まで世界各地で展開されてきました。

日本では勿論、作中にもアメコミの金字塔マーベル・コミックの名を出しましたが、この【ネイムレス】は私なりの解釈で超能力というものを綴っていければと思っています。

既出のストーリー展開となってしまう虞があつて非常に怖いのですが、まあ、そこは ね、何とか適当に凌いでいきたいですよねw

さてさて、それでは来週にまた投稿させて頂きます。

本日も御一読頂きましてありがとうございます。

お疲れ様です。

T・Fでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3165z/>

ネイムレス

2011年12月17日10時57分発行